教育等に関するアンケート
報告書
2025

The Report of Learning Outcome Survey 2025



鳴門教育大学

調査の概要・目次

目的	本学の教育の状況についてデマンド・サイドの意見を把握することにより，教育の質の維持・向上及び教育研究体制の一層の充実を図ることを目的とする。				
標本抽出および配布回収方法	修了年次の大学院院生に対する全数調査。 電子メールまたはQRコードを記した用紙の配布により調査URLを知らせ，Webアンケートフォームを通じて回答を収集。				
実施時期	令８年１月～３月				
実施機関	総務委員会				
分析機関	教務委員会（が設置した「教育等に関するアンケート分析専門部会」）				
配布・回収数	区分		回答者数	対象者数	回収率
	全体		132	197	67.0%
	修士課程		55	82	67.1%
	専門職学位課程		77	115	67.0%

目次

総括			3
回答データ	01	回答データの要約	3
	02	入学前の状況	4
	03	入学動機	5
	04	教育レベル	6
	05	教育内容	7
	06	授業時間	8
	07	ゼミ活動	9
	08	教育環境	10
	09	大学教員	11
	10	学生支援	12
	11	本学で学んだ成果：教育内容に対する理解	13
	12	具体的な成果：社会で活用できる汎用的なスキル	14
	13	具体的な成果：教師としてのコンピテンシー	15
	14	教育の有用性に対する実感	16
	15	卒業後・修了後の進路	17
	16	自由記述	18
参考データ	自由記述（原文）		19
	回答者の所属専修・コース名		27

総括

令和7年度と過去4年間の回答を得点化して結果を比較したところ，**修士課程では，社会で活用できる汎用的スキルや教育の有用性に対する実感において高い評価が維持**された一方で，**教育に対する満足や有用性に係る各項目（教育内容，ゼミ指導，教育環境，大学教員，学生支援等）では過去4年間の平均を下回る結果**となり，**学修支援体制や研究環境のさらなる充実が課題**として示された。
専門職学位課程では，教育に対する満足や有用性に係る各項目において，引き続き高い評価を維持した。 また，実践的な学びを重視した教育内容と教職への確かな進路形成が本課程の強みとして確認された。さらに，「教師としてのコンピテンシー」及び「社会で活用できる汎用的スキル」の各領域においても高い水準を維持しており，**教員として必要な資質・能力がバランスよく育成されている**ことが示された。
なお，**調査全体の回収率は全体で67.0%であり，前年度の93.5%を大きく下回った。 そのため，結果の解釈には一定の留意が必要である。**

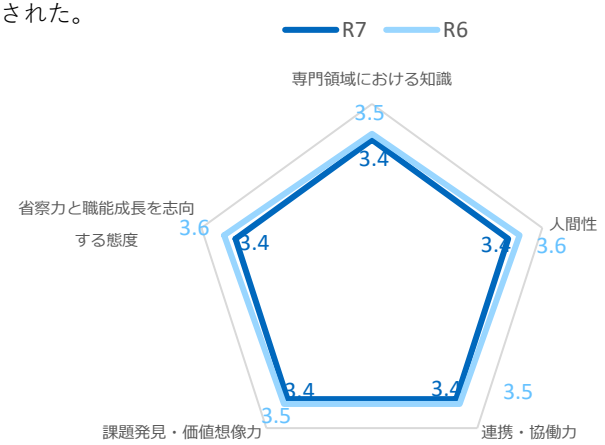
01　回答データの要約

修士課程

入学前の状況は，**「他大学の学部生・研究生」が42%と最も高く，**引き続き**入学者の中心**を占めている。 また，**「徳島県外の現職教員」が24%となり，近年より増加するなど，入学者構成の多様化**がみられた。 修了後の進路は，**「教員以外の職に就職」が51%と最多**であり，「教員として就職」が20%，「現職復帰」が18%となった。

教育に対する満足や有用性を1～4点で得点化して平均を算出した結果は，**全体として3.0～3.4点と一定の評価を維持しているものの，「教育内容」（P７），「ゼミ指導」（P9），「教育環境」（P10），「大学教員」（P11），「学生支援」（P12）等の項目で過去4年間平均を下回った。**

本学で学んだ成果については，『鳴門パースペクティブ』としてと「社会で活用できる汎用的スキル」4領域＋「専門領域における知識」1領域の計5領域で評価した。**すべての領域で3.4と高い水準を示しており，専門的知識に加え，人間性，協働力，課題発見・価値創造力，省察力と職能成長を志向する態度がバランスよく育まれた**ことが示された。

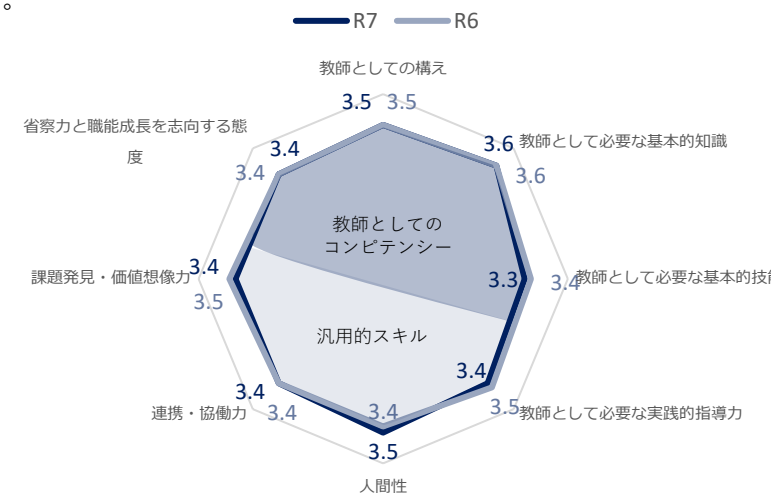


専門職学位課程

入学前の状況は，**「他大学の学部生・研究生」が43%と最も高く，県内外の現職教員も40%を占めるなど，多様な学生によって構成**されている。 入学動機は，**「自発的意志に基づく高度な教育実践能力の習得」が53%と過半数を占めた。** 修了後の進路は，**「教員として就職」が55%，「現職復帰」が41%であり，両者を合わせると96%が教職関係の進路を選択**している。

教育に対する満足や有用性を1～4点で得点化して平均を算出した結果は，**全体として3.1～3.6点であり，過去4年間平均と同程度の水準を維持している。**

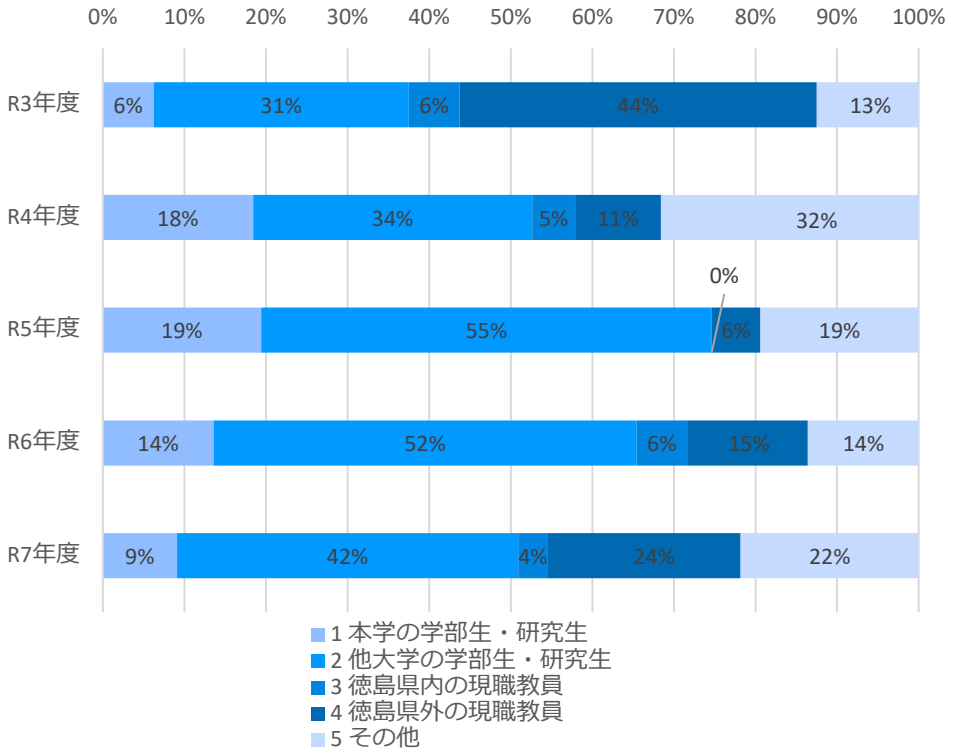
本学で学んだ成果については，『鳴門パースペクティブ』として「教師としてのコンピテンシー」4領域と「社会で活用できる汎用的スキル」4領域の計8領域で評価した。**全領域が3.4～3.6点と非常に高い水準であり，教師として必要な知識・技能・実践的指導力に加え，人間性や協働力，課題発見・価値創造力，省察力と職能成長を志向する態度がバランスよく育まれた**ことが示された。



＊鳴門パースペクティブとは，8領域（26観点）からなる教員に求められる資質・能力を本学独自に体系化したものである。全ての領域が総合満足度と高い相関にある。

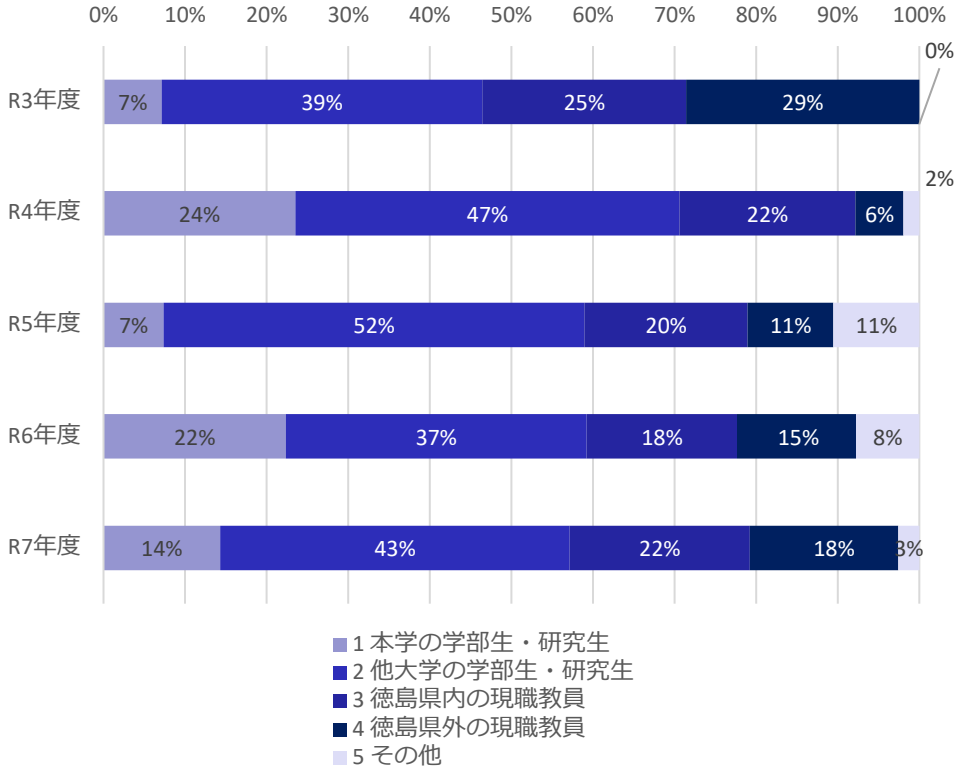
「**入学前のあなたの状況を教えてください。**」に対し単一回答を求め，各年の結果を構成比で示した。

修士課程



令和7年度は，**「他大学の学部生・研究生」が42%と最も高く，引き続き入学者の中心を占めている。** 一方で，令和5・6年度（55%，52%）と比べると減少した。「徳島県外の現職教員」は24%となり，令和4～6年度（11%，6%，15%）を上回り回復傾向がみられる。また，**「その他」も22%と比較的高い割合を占めた。** これに対し，「本学の学部生・研究生」は9%，「徳島県内の現職教員」は4%にとどまった。令和7年度は**他大学出身者が中心であることに変わりはないが，県外現職教員やその他の割合が増加したことが特徴**である。

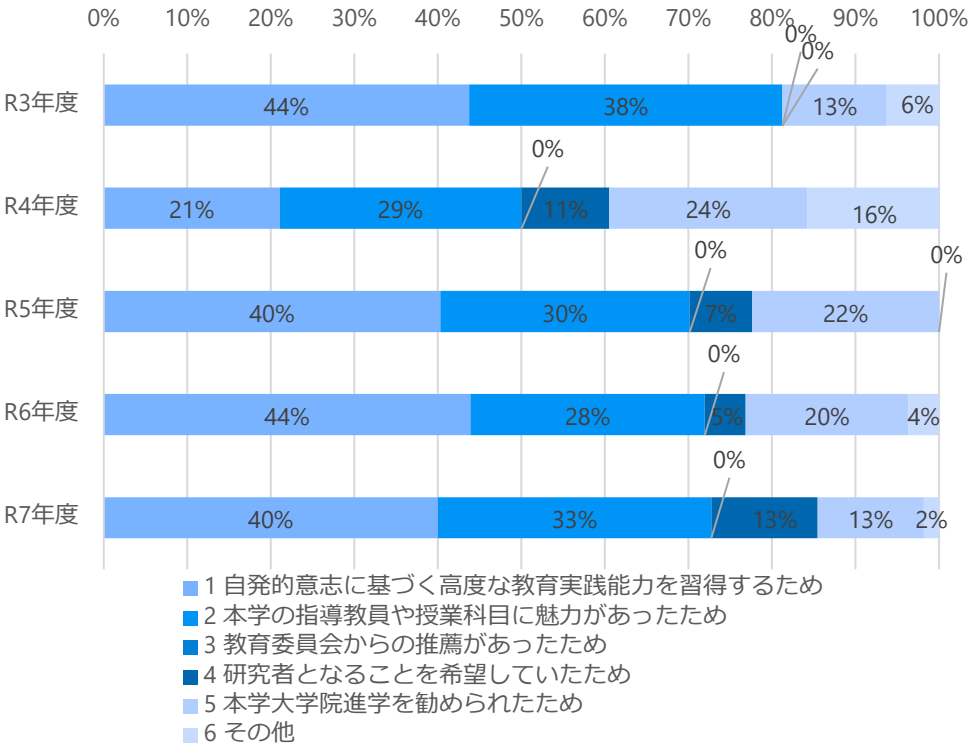
専門職学位課程



令和7年度は，**「他大学の学部生・研究生」が43%と最も高く，過去4年間と比較しても引き続き中心的な入学者層**となっている。「本学の学部生・研究生」は14%で，令和6年度（22%）を下回った。一方，「徳島県内の現職教員」は22%で，令和5年度（20%）や令和6年度（18%）を上回り，一定の割合を維持している。「徳島県外の現職教員」は18%となり，令和5年度（11%），令和6年度（15%）から増加した。また，「その他」は3%と過去4年間で最も低い割合であった。以上より，令和7年度は**他大学出身者を中心としつつ，県内外の現職教員の割合も比較的高いことが特徴**である。

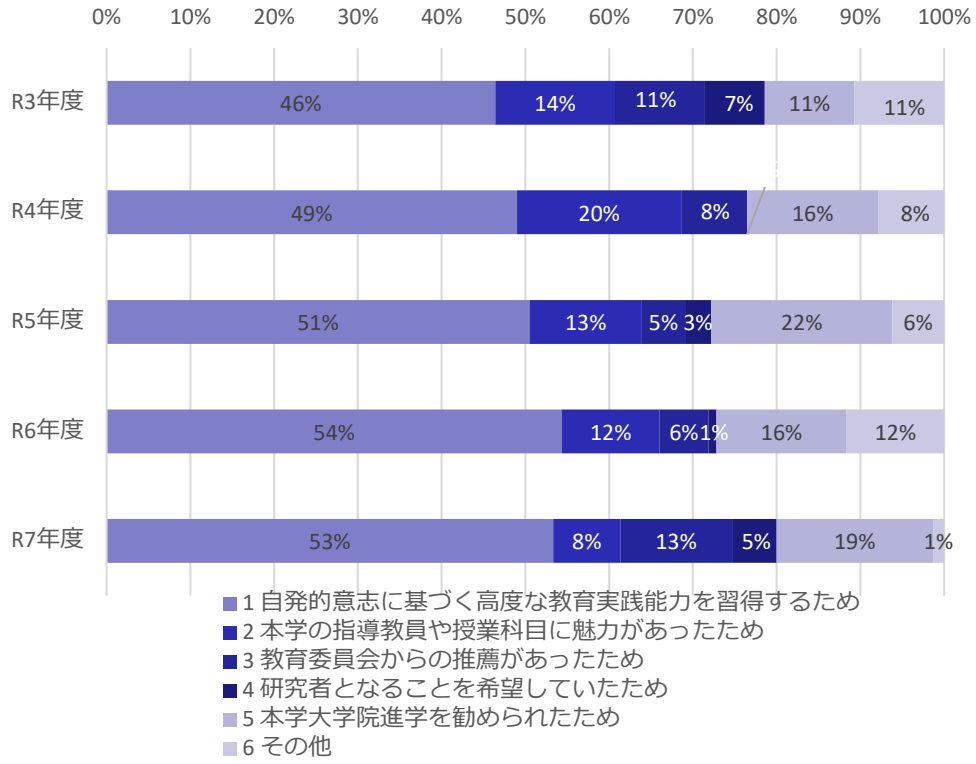
「**入学動機は何ですか？**」に対し単一回答を求め，各年の結果を構成比で示した。

修士課程



令和7年度の入学動機は，**「自発的意志に基づく高度な教育実践能力の習得」が40%で最も高く，過去4年間と同様に主要な入学動機**となっている。 また，**「大学の指導教員や授業科目に魅力があったため」は33%で，令和6年度（28%）から増加**しており，本学の教育・研究内容への関心の高さがうかがえる。 一方，「研究者となることを希望していたため」は13%となり，令和5・6年度を上回った。「本学大学院進学を勧められたため」は13%で，過去3年間より減少している。以上より，令和7年度は**外部からの勧奨による進学よりも，自身の資質向上や本学の教育内容への関心を背景とした主体的な進学傾向が強いことが特徴**である。

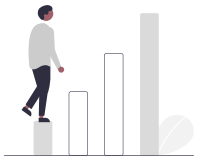
専門職学位課程



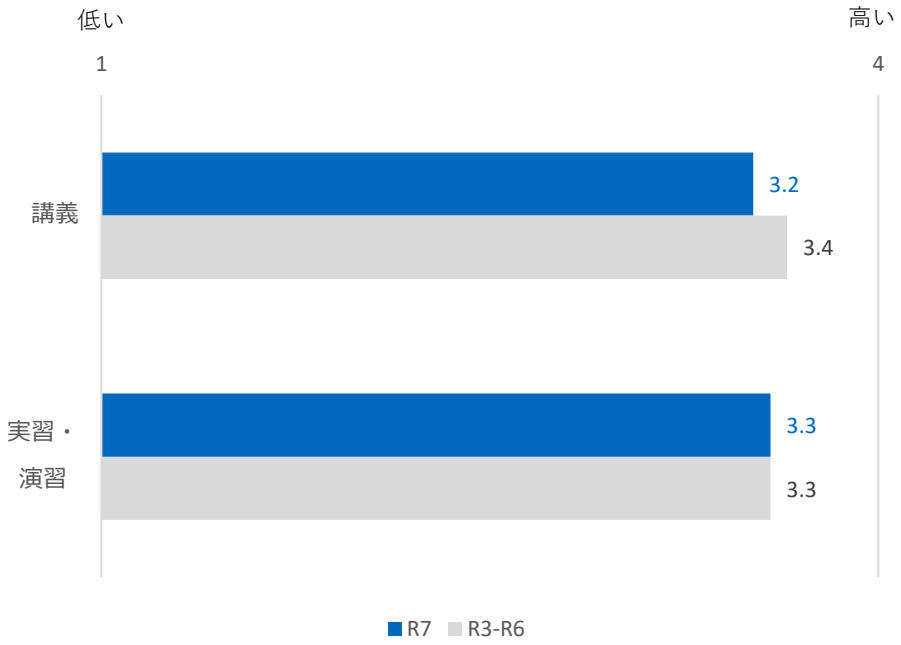
令和7年度の入学動機では，**「自発的意志に基づく高度な教育実践能力の習得」が53%と過半数を占め，過去4年間と比較しても高い水準を維持**している。 一方，**「本学の指導教員や授業科目に魅力があったため」は8%と過去4年間で最も低くなった。** 「教育委員会からの推薦」は13%で前年度より増加し，「本学大学院進学を勧められたため」も19%と前年度（16%）を上回った。 また，「その他」は1%と最も低い割合であった。以上より，令和7年度は**自身の資質向上を目的とした主体的な進学意識が特に強く，それに加えて推薦や勧奨を契機とした進学も一定数みられることが特徴**である。

修士課程：講義，実習・演習の内容のレベルについて，専門職学位課程：講義の内容のレベル，実習のあり方，指導担当教員の指導について，
4件法での回答を求め，「高い」=4点，「どちらかといえば高い」=3点，「どちらかといえば低い」=2点，「低い」=1点として平均値を算出した。

3点以上は，回答の大半が「高い」「どちらかといえば高い」であり， 3.5点以上は「高い」が半数以上を占めていることを示す（以降，同様）。

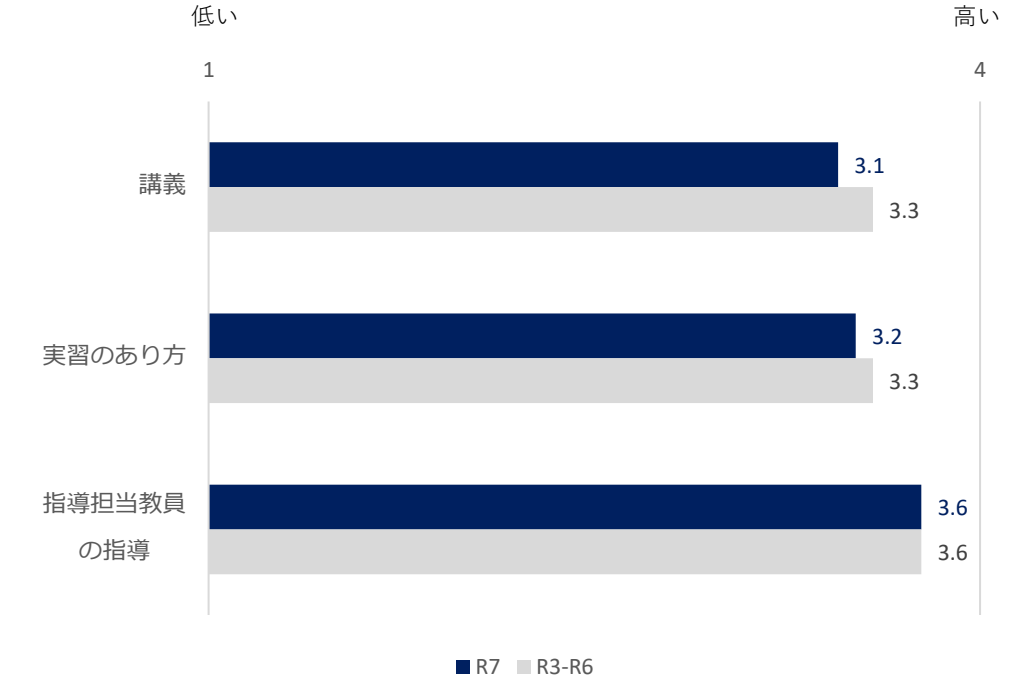


修士課程



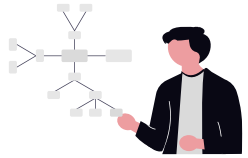
令和7年度は，**「講義」が3.2，「実習・演習」が3.3**であった。 過去4年間平均（R3～R6）と比較すると，**「講義」は3.4から0.2ポイント低下しており，相対的に満足度がやや下がっている。** 一方，**「実習・演習」は3.3で過去4年間平均と同水準を維持**している。 また，令和7年度は**「実習・演習」の評価が「講義」を上回っており，実践的な学びに対する満足度の高さがうかがえる。** 以上より，**実習・演習については安定した評価を維持できている**一方で，**講義に対する評価はやや低下**している。

専門職学位課程

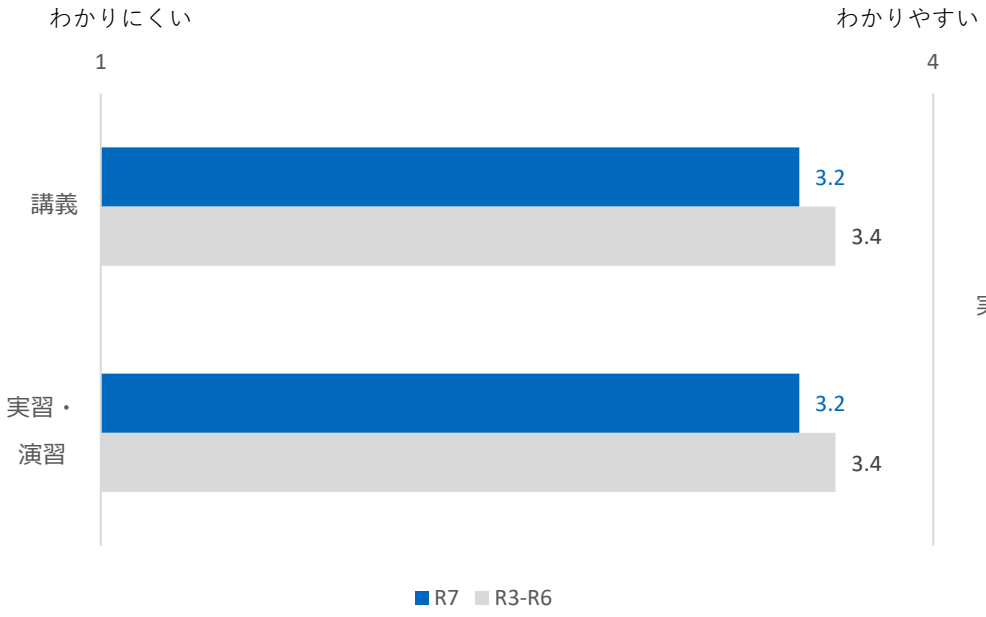


令和7年度は，**「指導担当教員の指導」が3.6と最も高く，過去4年間平均（3.6）と同水準であり，継続して高い満足度を維持**している。 一方，**「講義」は3.1で過去4年間平均（3.3）を0.2ポイント下回り，「実習のあり方」も3.2で過去4年間平均（3.3）をわずかに下回った。**
以上より，令和7年度は**指導担当教員による個別指導への評価は引き続き高い**ものの，**講義や実習のあり方に対する評価はやや低下**している。

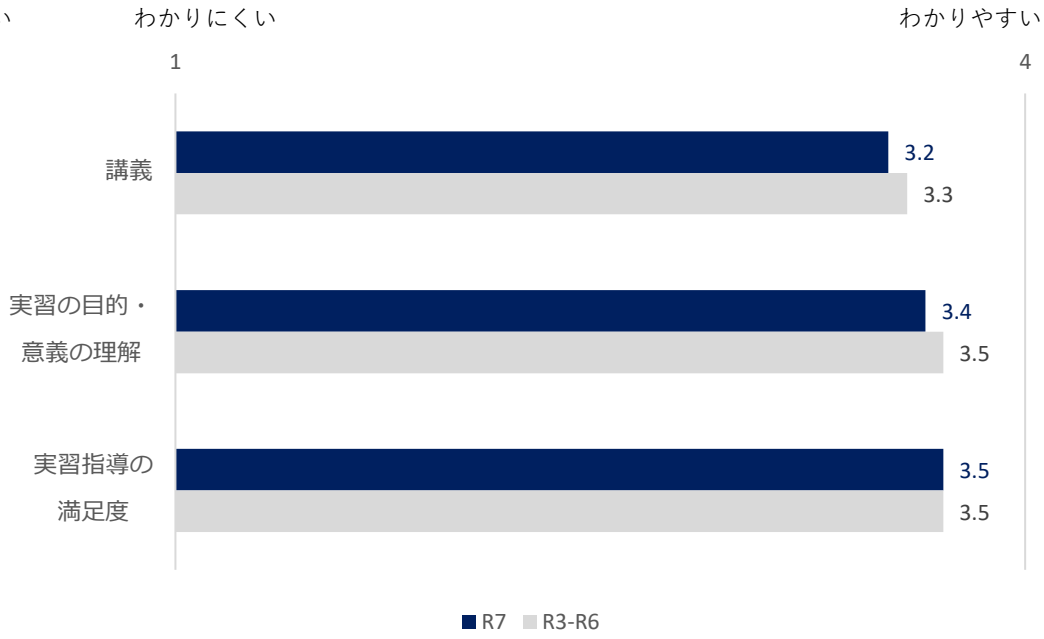
修士課程：講義，実習・演習，教育実習の内容の理解について，専門職学位課程：講義の内容，実習の目的・意義の理解，実習指導の満足度について，
4件法での回答を求め，
「わかりやすい」=4点，「どちらかといえばわかりやすい」=3点，「どちらかといえばわかりにくい」=2点，「わかりにくい」=1点として平均値を算出した。



修士課程



専門職学位課程



令和7年度の評価は，**「講義」「実習・演習」ともに3.2であった。** 過去4年間平均（いずれも3.4）と比較すると，**それぞれ0.2ポイント低下しており，全体的に満足度がやや低下**している。 一方で，講義と実習・演習の評価に差はみられず，双方とも同程度の評価となった。 以上より，令和7年度は**講義・実習ともに一定の評価を得ているものの，過去4年間平均を下回る結果**となった。

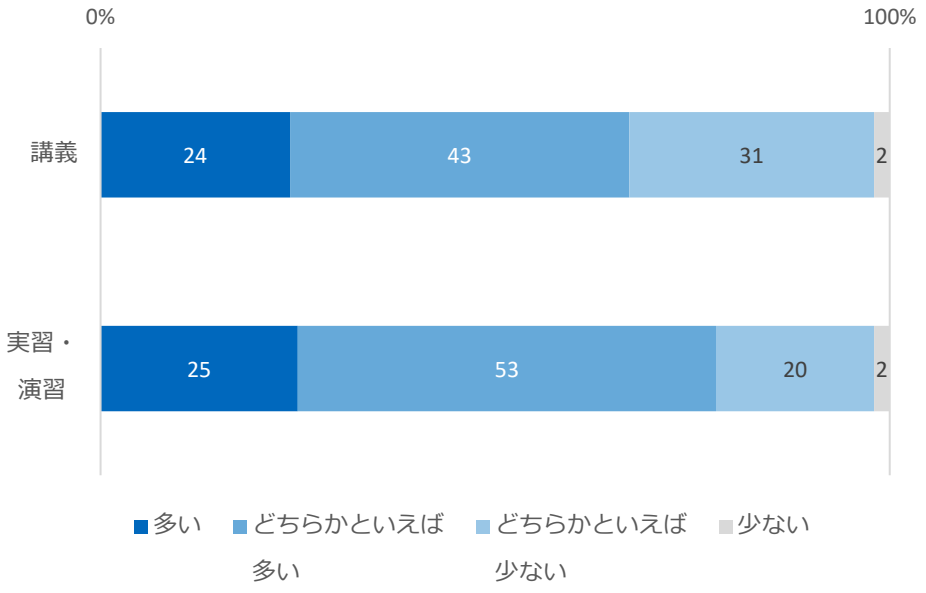
令和7年度の評価は，**「実習指導の満足度」が3.5と最も高く，過去4年間平均（3.5）と同水準を維持**している。 また，**「実習の目的・意義の理解」は3.4で，過去4年間平均（3.5）をわずかに下回ったものの，高い評価**を得ている。 「講義」は3.2で，過去4年間平均（3.3）を0.1ポイント下回った。以上より，令和7年度は**実習指導に対する満足度が引き続き高く，実習の目的や意義についても十分理解されている**ことがうかがえる。 一方で，**講義の評価はやや低下**している。

06　授業時間

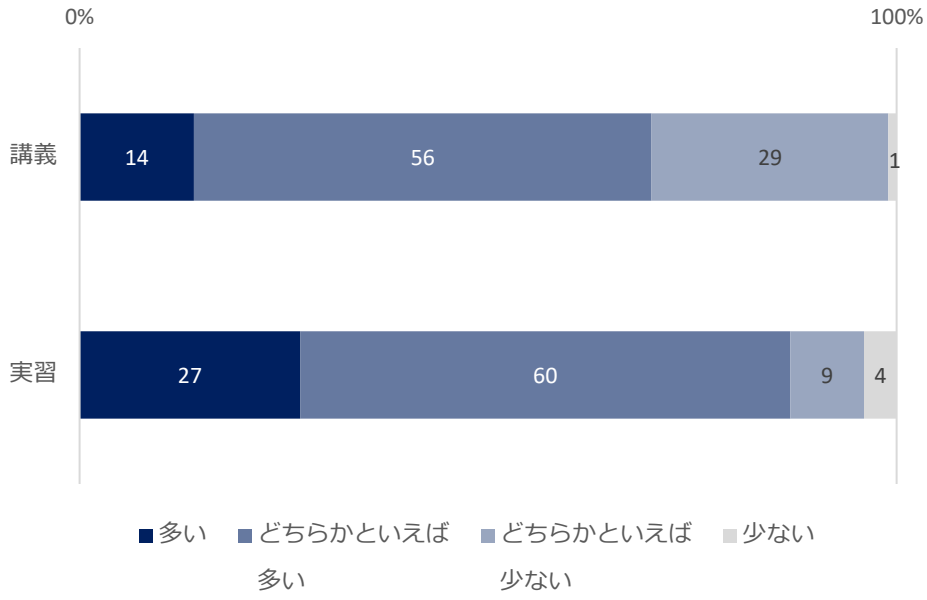
修士課程：必修とされる講義，実習・演習，教育実習の時間数について，専門職学位課程：必修とされる講義，実習の時間数について，4件法で回答を求めた。
単純な得点化に向かない選択肢であるため，R7年度の回答のみを対象として構成比を示す。



修士課程



専門職学位課程



令和7年度の授業量に関する評価では，**「講義」では「多い」24%，「どちらかといえば多い」43%で合わせて67%**となり，「どちらかといえば少ない」31%，「少ない」2%を大きく上回った。**実習・演習では「多い」25%，「どちらかといえば多い」53%で合わせて78%**となり，講義を11ポイント上回る結果となった。一方で，「少ない」「どちらかといえば少ない」の合計は，講義が33%，実習・演習が22%であり，実習・演習の方が授業量を多いと感じる学生の割合が高いことがうかがえる。以上より，**講義・実習・演習ともに授業量が多いと感じる学生が多く，特に実習・演習ではその傾向がより顕著にみられる**結果となった。

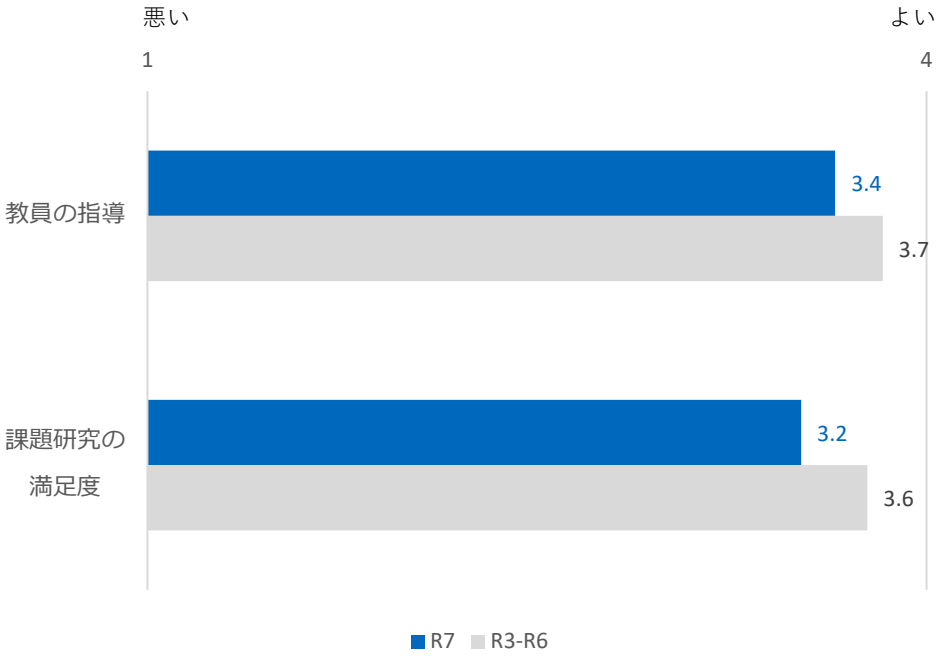
令和7年度の授業量に関する評価では，**「講義」では「多い」14%，「どちらかといえば多い」56%で合わせて70%**となり，「どちらかといえば少ない」29%，「少ない」1%を大きく上回った。**実習では「多い」27%，「どちらかといえば多い」60%で合わせて87%**となり，講義以上に授業量が多いと受け止められている。**以上より，令和7年度は講義・実習ともに授業量が多いと感じる学生が多く，特に実習ではその傾向が強くみられる**結果**となった。**

課題研究における教員の指導，満足度について，

4件法での回答を求め，「よい」=4点，「どちらかといえばよい」=3点，「どちらかといえば悪い」=2点，「悪い」=1点として平均値を算出した。



修士課程

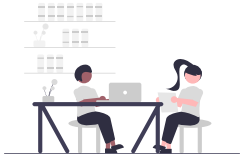


専門職学位課程

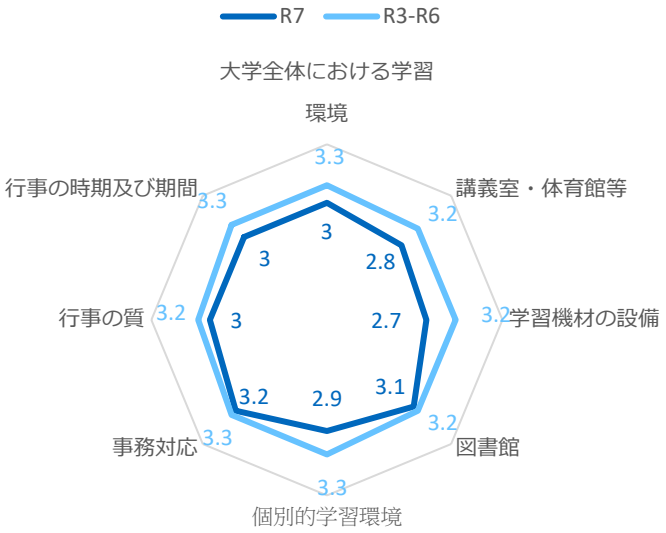
該当する設問なし

令和7年度の評価は，**「教員の指導」が3.4，「課題研究の満足度」が3.2となった。** 過去4年間平均と比較すると，**「教員の指導」は3.7から0.3ポイント，「課題研究の満足度」は3.6から0.4ポイント低下しており，**4点満点中3点以上を維持しているものの，**いずれも平均を下回る結果**となった。**以上より，令和7年度は教員による指導や課題研究に対して一定以上の評価が得られているものの，過去4年間平均と比較すると低下**しており，研究指導体制や課題研究の進め方のさらなる充実が求められる。

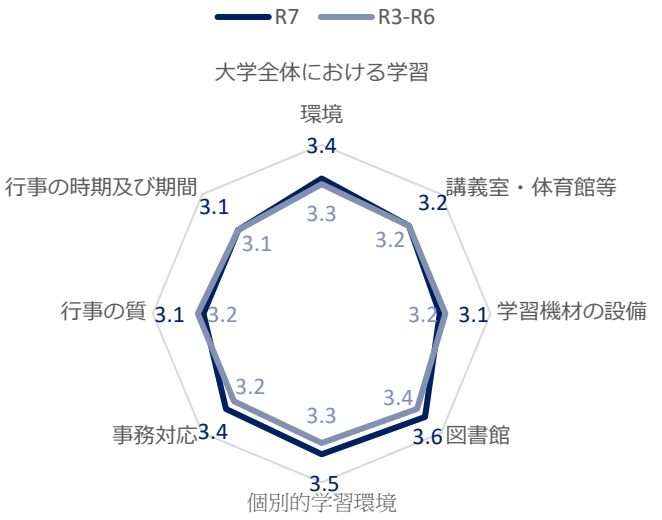
教育環境に係る7項目（「講義室・体育館等の施設について」「椅子・机・PCの学習機材の設備について」「図書館の蔵書・環境について」「大学内におけるゼミ室等個別的学習環境について」「事務窓口の対応について」「大学が企画・主催する行事の質について（例：ガイダンス等）」「大学が企画・主催する行事の時期及び期間について」「大学全体における学習環境について」）に4件法での回答を求めた。
「高い」=4点，「どちらかといえば高い」=3点，「どちらかといえば低い」=2点，「低い」=1点として平均値を算出した。



修士課程



専門職学位課程



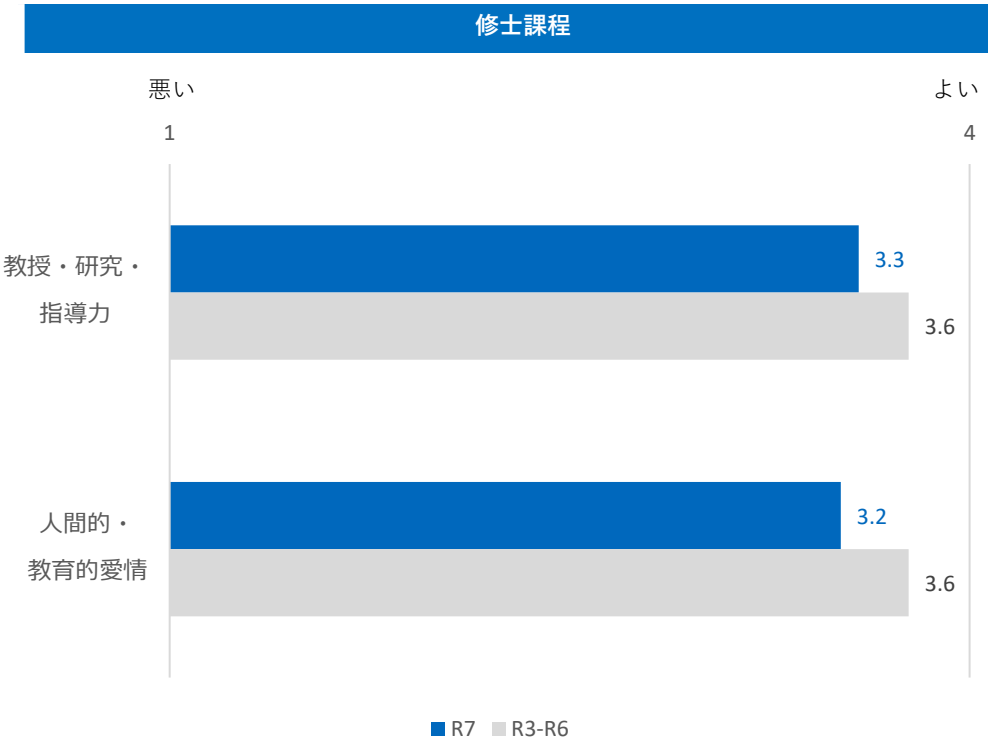
令和7年度の大学環境に関する評価は，**すべての項目で3.0前後の比較的高い水準を維持**しているものの，**過去4年間平均（R3～R6）と比較すると，全体的に平均を下回る**結果となった。一方で，「事務対応」「図書館」は概ね過去4年間平均と同程度の評価を維持している。以上より，令和7年度は大学環境全般に対して一定の満足度が認められるものの，**学習環境や施設・設備面の評価がやや低下しており，学修支援環境のさらなる充実が課題**として考えられる。

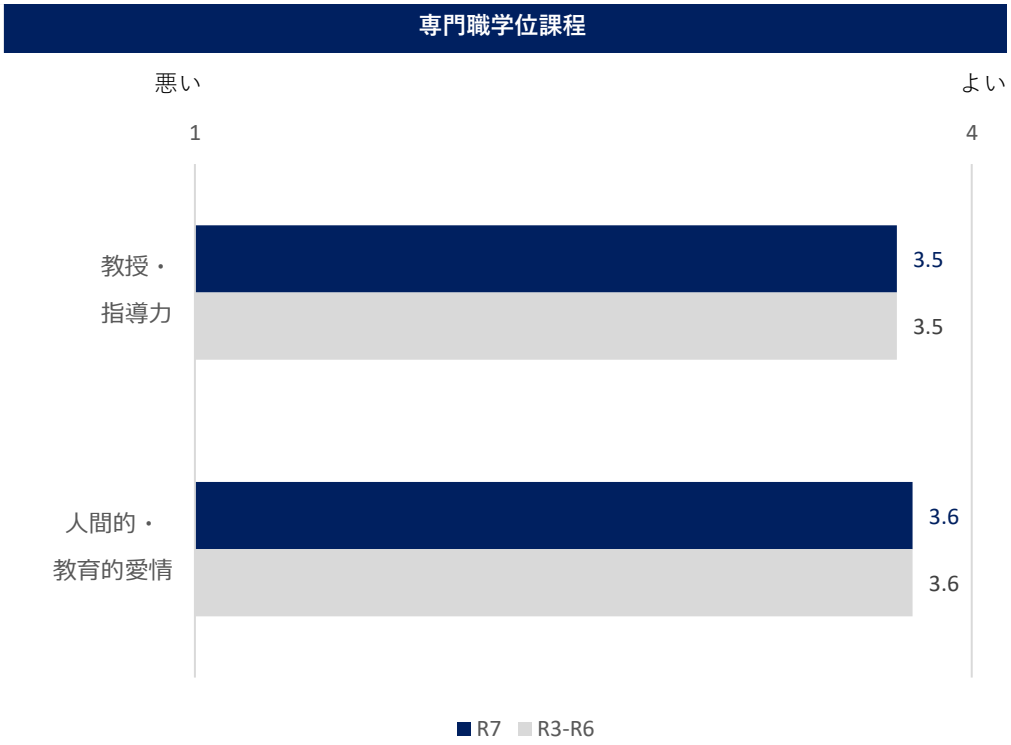
令和7年度の大学環境に関する評価は，**全体的に3.1～3.6と良好な水準にあり，多くの項目で過去4年間平均を上回った。**特に，「大学全体における学習環境」「図書館」「個別的学習環境」「事務対応」において改善がみられる。**全体として，学習環境や施設・設備，学生支援に対する評価は過去4年間平均よりやや向上しており，大学環境に対する満足度の改善**がうかがえる。



大学教員について（大学教員の教授・研究・指導力について」「大学教員の人間的・教育的愛情について（親身になってくれるか，勉学等に関し愛情をもって時には厳しく，時にはやさしく接したか等）」）2つの質問に4件法での回答を求めた。

「よい」=4点，「どちらかといえばよい」=3点，「どちらかといえば悪い」=2点，「悪い」=1点として平均値を算出した。





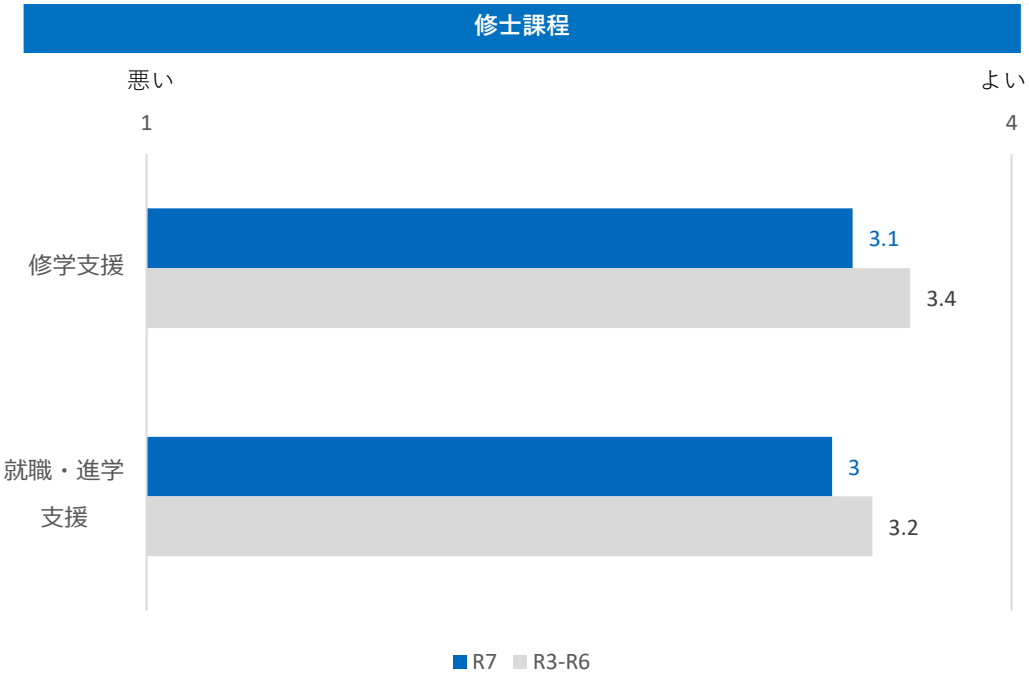
令和7年度の評価は，「教授・研究・指導力」が3.3，「人間的・教育的愛情」が3.2となり，いずれも**一定の評価を得ている。** しかし，**過去4年間平均（ともに3.6）と比較すると，「教授・研究・指導力」は0.3ポイント，「人間的・教育的愛情」は0.4ポイント低下**した。特に，「人間的・教育的愛情」の低下幅が大きく，**学生との関わりや支援に対する満足度がやや低下**していることがうかがえる。 **全体として，一定の水準は維持しているものの，過去4年間平均を下回っており，指導や学生支援のさらなる充実が求められる**結果となった。

令和7年度の教員評価は，**「教授・指導力」が3.5，「人間的・教育的愛情」が3.6となり，いずれも過去4年間平均と同水準**であった。 特に，**「人間的・教育的愛情」は最も高い評価を得ており，教員の学生に対する支援や関わりが高く評価されている**ことがうかがえる。以上より，令和7年度は教員の指導力と人間性の両面において安定した評価を維持しており，**教員に対する満足度は引き続き高い水準にある**ことが示された。

10　学生支援

学生生活に係る質問（修学支援，修了後に向けた就職・進学・復職支援）について，4件法での回答を求めた。
「よい」=4点，「どちらかといえばよい」=3点，「どちらかといえば悪い」=2点，「悪い」=1点として平均値を算出した。







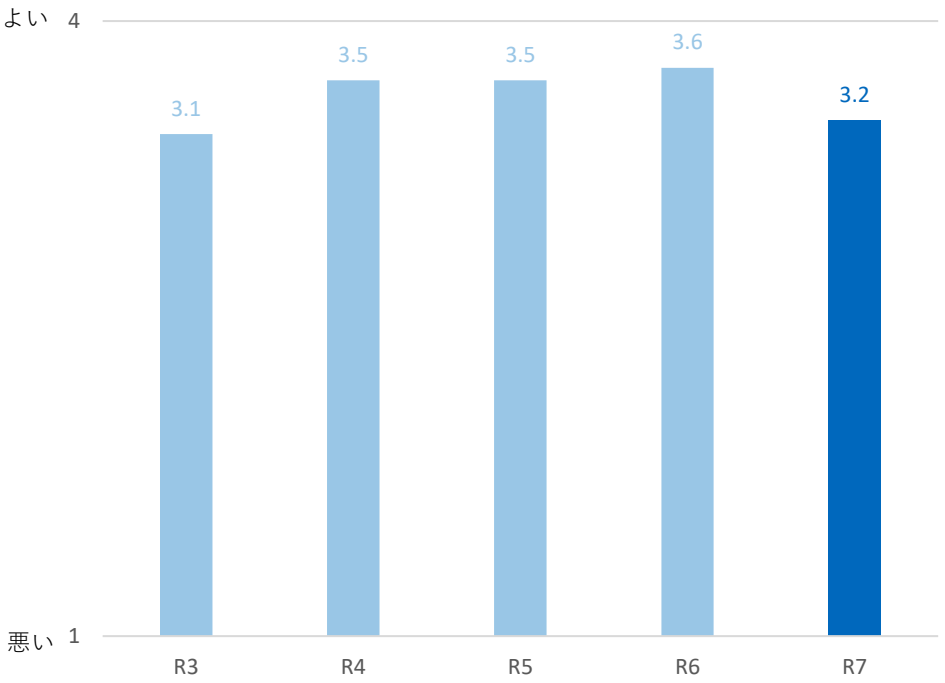
令和7年度の評価は，「修学支援」が3.1，「就職・進学支援」が3.0となり，いずれも一定の評価を得ている。しかし，**過去4年間平均と比較すると，「修学支援」は0.3ポイント，「就職・進学支援」は0.2ポイント低下している。** 特に，修学支援の評価低下がやや大きく，学生支援に対する満足度が過去4年間平均を下回る結果となった。両項目とも3点以上を維持しており，支援体制は概ね良好に評価されているものの，**支援内容のさらなる充実が求められる。**

令和7年度の「修学支援」及び「就職・進学支援」の評価は，ともに3.3であり，**過去4年間平均（R3～R6）と同水準**であった。両項目とも安定した評価を維持しており，学生支援に対する満足度は引き続き良好な水準にあることがうかがえる。以上より，令和7年度は修学面及び就職・進学面の支援について，過去4年間と同程度の評価を得ており，**支援体制が継続的に機能している**ことが示された。

本学で学んだことの成果（教育内容の理解度）について，4件法で回答を求め，
「よい」=4点，「どちらかといえばよい」=3点，「どちらかといえば悪い」=2点，「悪い」=1点として平均値を算出した。

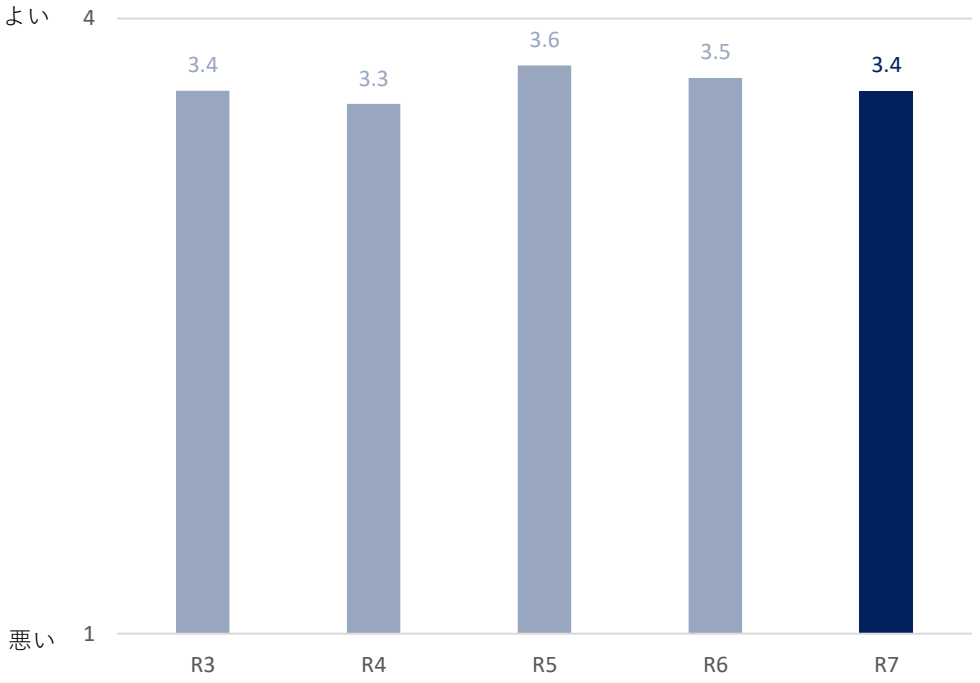


修士課程



令和7年度の評価は3.2となり，**令和6年度（3.6）から0.4ポイント低下した。** また，令和3～6年度の平均値（3.4）を0.2ポイント下回っている。過去の推移を見ると，令和3年度の3.1から令和6年度には3.6まで上昇していたが，令和7年度はその傾向が一転し，評価が低下した。以上より，令和7年度は**一定の評価水準を維持しているものの，過去4年間平均を下回る結果となったことから，評価低下の要因を分析し，さらなる改善につなげていく**ことが求められる。

専門職学位課程



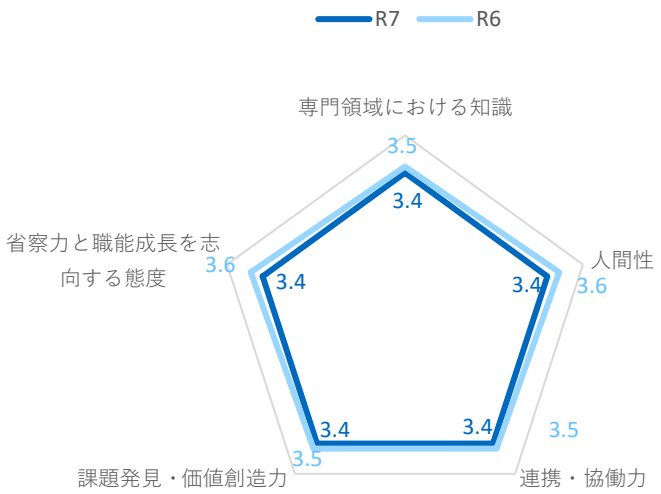
令和7年度の評価は3.4であり，令和3年度と同水準となった。過去の推移を見ると，令和4年度に3.3へやや低下した後，令和5年度には3.6まで上昇し，令和6年度も3.5と高い評価を維持していたが，令和7年度は前年度から0.1ポイント低下した。一方で，令和3～6年度の平均値（3.45）と比較するとほぼ同水準であり，全体として安定した評価を維持している。以上より，**令和7年度は過去数年間の高い評価水準を概ね維持しており，継続して良好な評価を得ている**ことがうかがえる。

12　具体的な成果：社会で活用できる汎用的なスキル



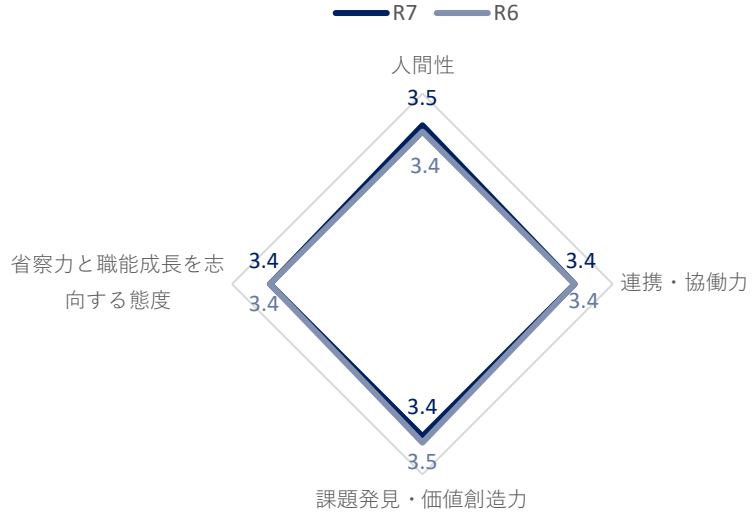
本学で学んだ成果として汎用的資質の修得（修士課程：「専門領域における知識」「人間性（主体性，自己肯定感，困難を乗り越え回復する力，多様性への感受性等）」，「連携・協働力（コミュニケーション力，チームワーキング力，合意形成力）」「課題発見・価値創造力（データ活用力，多面的・多角的な見方・考え方，論理的思考力等）」「省察力と職能成長を志向する態度（学び続ける態度，自己調整力等）」，専門職学位課程：「人間性（主体性，自己肯定感，困難を乗り越え回復する力，多様性への感受性等）」「連携・協働力（コミュニケーション力，チームワーキング力，合意形成力）」「課題発見・価値創造力（データ活用力，多面的・多角的な見方・考え方，論理的思考力等）」「省察力と職能成長を志向する態度（学び続ける態度，自己調整力等）」）に対して，修士課程では５項目，専門職学位課程では４項目を4件法で回答を求めた。
「身に付いた」=4点，「どちらかといえば身に付いた」=3点，「どちらかといえば身に付いていない」=2点，「身に付いていない」=1点として平均値を算出した。

修士課程



令和7年度は，「専門領域における知識」「人間性」「連携・協働力」「課題発見・価値創造力」「省察力と職能成長を志向する態度」の全ての項目で3.4となった。令和6年度はいずれの項目も3.5～3.6であり，令和7年度は全体的に0.1～0.2ポイント低下している。しかしながら，**全項目で3点台半ばの評価を維持しており，各資質・能力に対する満足度は引き続き高い水準**にある。 以上より，**令和7年度は令和6年度と比較してやや評価が低下したものの，専門的知識や人間性，協働力など教職に必要な資質・能力が概ね身に付いている**ことがうかがえる。

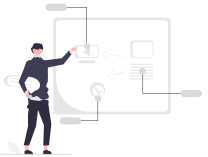
専門職学位課程



令和7年度は，**前年度に引き続き，全ての項目で3.4～3.5と高い評価水準を維持しており，良好な評価を得ていることがうかがえる。** 前年度と比較して「人間性」が0.1ポイント上昇したのに対し，「課題発見・価値創造力」が0.1ポイント低下している。
以上より，**令和7年度は全体として令和6年度と同水準を維持しており，人間性や協働力など教職に必要な資質・能力が概ね身に付いている**ことがうかがえる。

13　本学で学んだ成果：教師としてのコンピテンシー

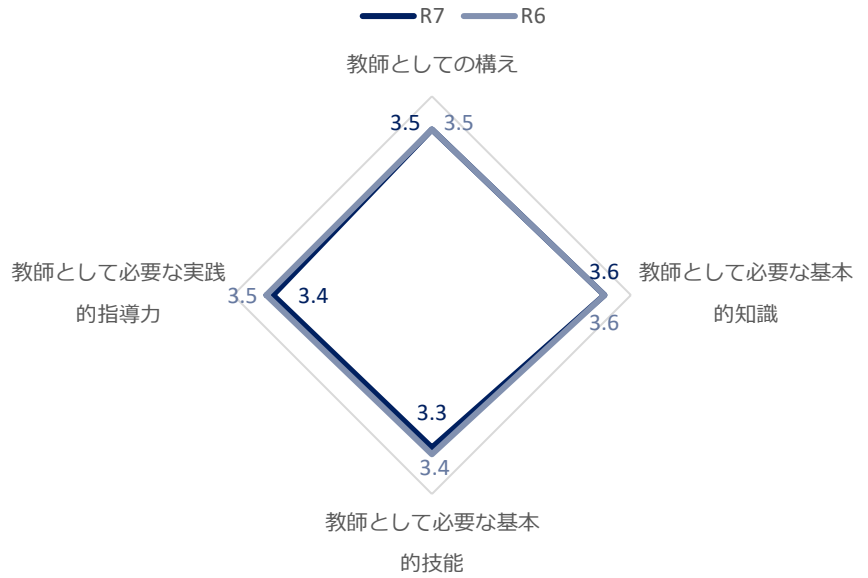
本学で学んだ成果として教育的資質の修得（「教師としての構え（教育観，使命感，人権意識等）」「教師として必要な基本知識（教職・教科・領域等に関する知識）」「教師として必要な基本的技能（個人指導，集団指導，学級経営等）」「教師として必要な実践的指導力（学習指導力，生徒指導力，特別な支援を必要とする子供への対応力等）」）に対して，専門職学位課程で４項目を4件法で回答を求めた。
「身に付いた」=4点，「どちらかといえば身に付いた」=3点，「どちらかといえば身に付いていない」=2点，「身に付いていない」=1点として平均値を算出した。



修士課程

該当する設問なし

専門職学位課程



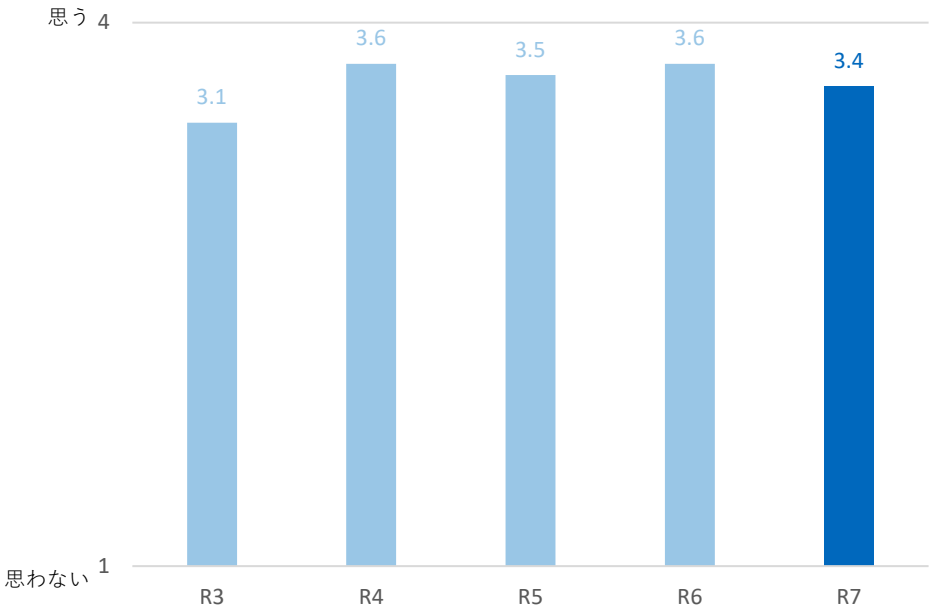
令和7年度は，**前年度に引き続き，全ての項目で3点台前半から半ばの評価を維持**しており，**教師として必要な資質・能力が概ね身に付いている**ことがうかがえる。 以上より，**教師としての構えや知識・技能・指導力について，引き続き高い評価が得られている**ことがうかがえる。

14　教育の有用性に対する実感

修士課程：「社会に出て，本学の教育内容が役立つと思いますか」に対し，4件法で回答を求め，「思う」=4点，「どちらかといえば思う」=3点，「どちらかといえば思わない」=2点，「思わない」=1点として各年の平均値を算出した。
専門職学位課程：「教育内容の満足度」に対し，4件法で回答を求め，「満足」=4点，「どちらかといえば満足」=3点，「どちらかといえば満足ではなかった」=2点，「満足ではなかった」=1点として各年の平均値を算出した。

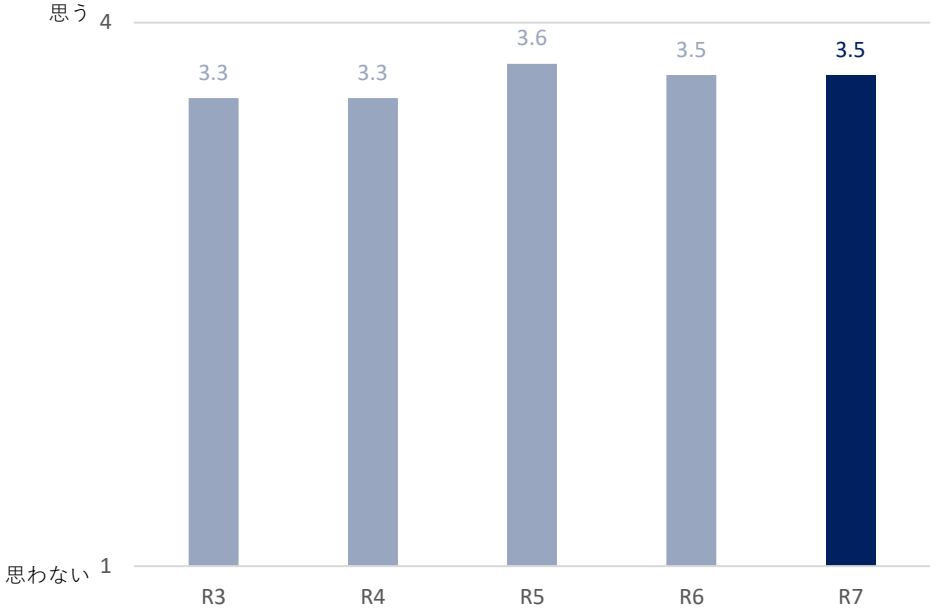


修士課程



令和7年度の評価は3.4であり，過去4年間の平均値（3.45）と比較するとほぼ同水準で，大きな変動はみられない。以上より，令和7年度は，**安定した評価が維持されており，引き続き良好な水準にある**ことがうかがえる。

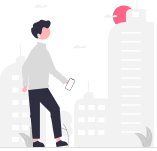
専門職学位課程



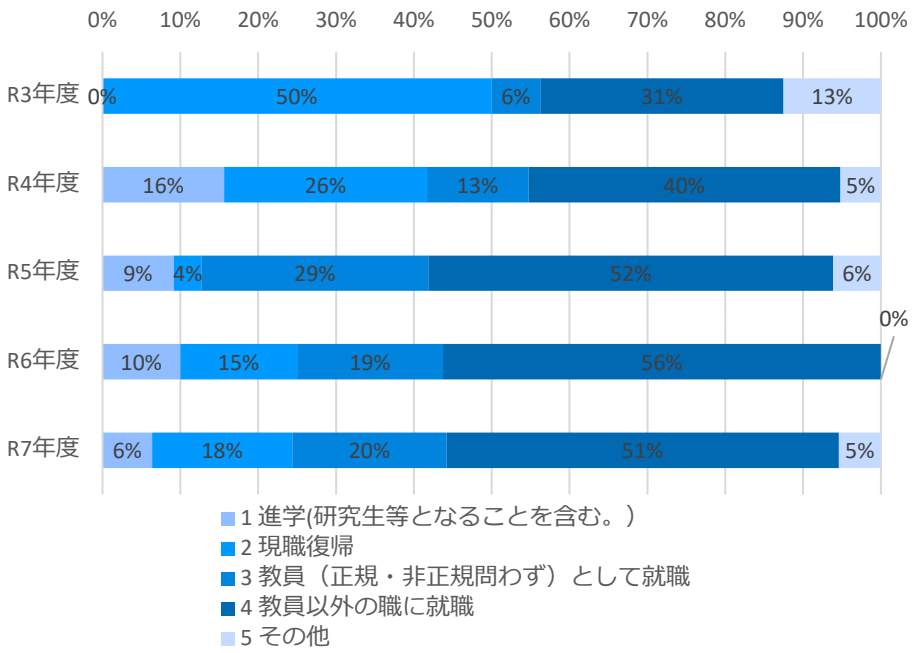
令和7年度の評価は3.5であり，令和6年度と同水準を維持した。過去4年間平均（3.43）と比較してもやや高い水準にあり，安定した評価が得られていることが分かる。以上より，令和7年度は**安定した評価が維持されており，引き続き良好な水準にある**ことがうかがえる。

15　卒業後・修了後の進路

卒業・修了後の進路予定を単一回答でたずね，各年の結果を構成比で示した。

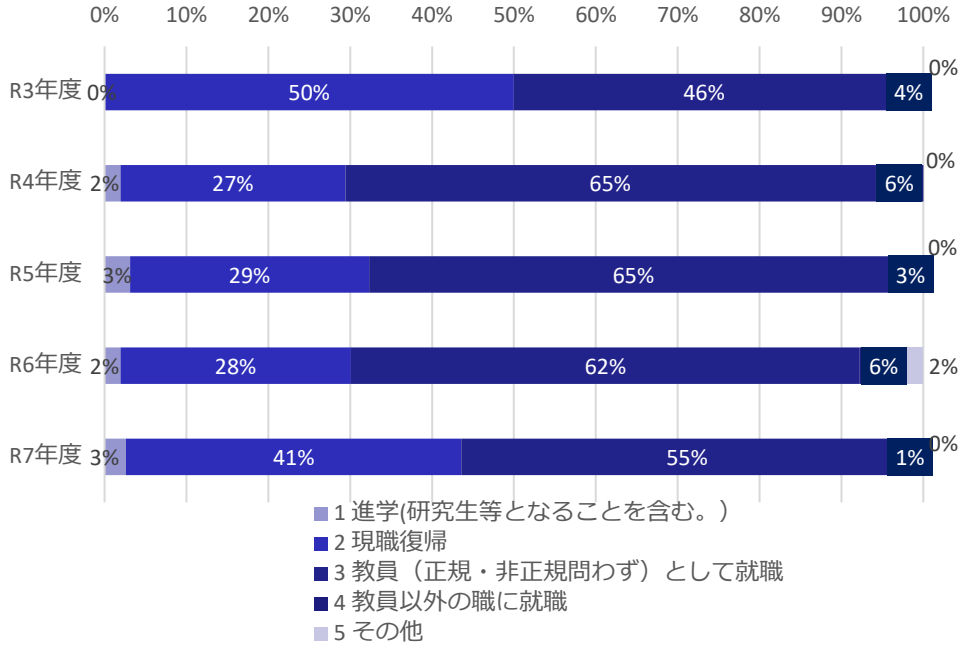


修士課程



令和7年度の修了後の進路では，**「教員以外の職に就職」が51%と最も高く，過去4年間と同様に主要な進路**となっている。 ただし，令和6年度（56%）からは5ポイント減少した。一方，「教員（正規・非正規問わず）として就職」は20%で，令和6年度（19%）とほぼ同水準であった。また，「現職復帰」は18%となり，前年度（15%）から増加している。「進学」は6%，「その他」は5%であった。以上より，令和7年度は**教員以外への就職が引き続き過半数を占める一方，現職復帰やその他の割合が増加しており，進路の多様化がみられる**ことがうかがえる。

専門職学位課程

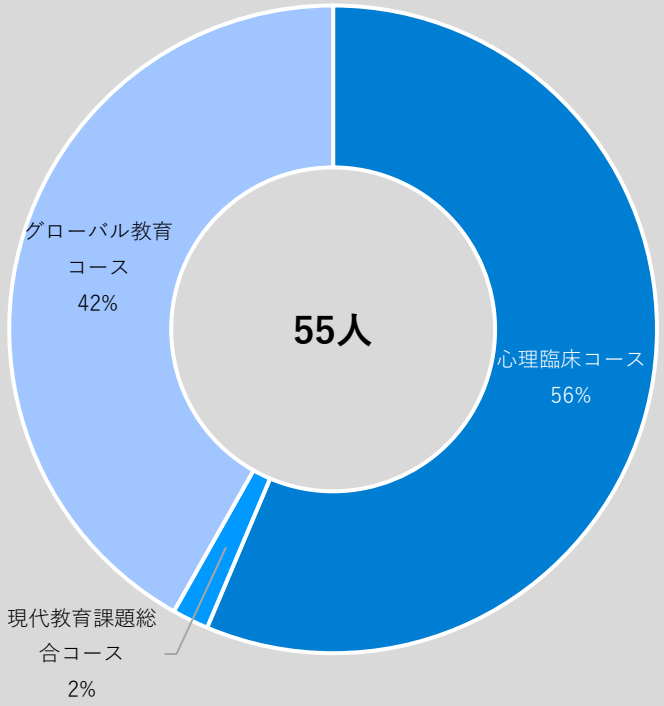


令和7年度の修了後の進路では，**「教員（正規・非正規問わず）として就職」が55%と最も高く，過去３年間と比較するとやや低下したものの，引き続き半数以上を占めている。**一方，「現職復帰」は41%となり，令和6年度（28%）から大きく増加した。「進学」は3%で前年度とほぼ同水準であり，「教員以外の職に就職」は1%，「その他」は0%であった。以上より，令和7年度は**教員として就職または現職復帰する割合が96%を占めており，多くの修了生が教職に関連する進路を選択している**ことがうかがえる。

参考データ：回答者の所属専修・コース内訳

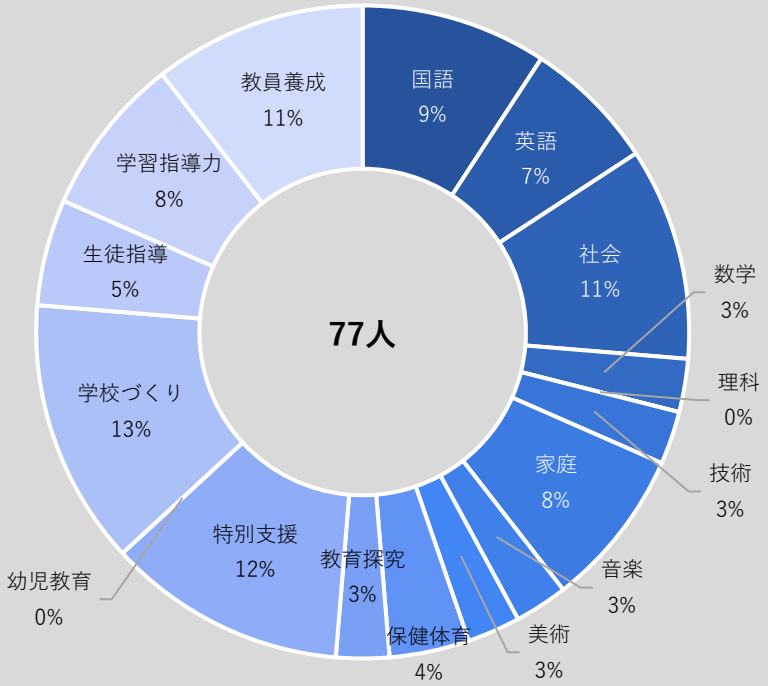
回答者の少ないコースの結果は全体に与えるウェイトが低いため，大学全体の結果としての解釈の妥当性に若干の留意が必要である。

修士課程



専攻・コース	回答数	構成比
心理臨床コース	31人	56%
現代教育課題総合コース	1人	2%
グローバル教育コース	23人	42%
計	55人	100%

専門職学位課程



専攻・コース	回答数	構成比
国語科教育コース	7人	9%
英語科教育コース	5人	7%
社会科教育コース	8人	11%
数学科教育コース	2人	3%
理科教育コース	0人	0%
技術・工業・情報教育コース	2人	3%
家庭科教育コース	6人	8%
音楽科教育コース	2人	3%
美術科教育コース	2人	3%
保健体育科教育コース	3人	4%
教育探求総合コース	2人	3%
特別支援教育コース	9人	12%
幼児教育コース	0人	0%
学校づくりマネジメントコース	10人	13%
生徒指導コース	4人	5%
学修指導力・ICT教育実践力開発コース	6人	8%
教員養成特別コース	8人	11%
計	76人	100%